

## 幸福論

誰もが幸福を願っているのに、幸福と縁の薄い人間が増大しているのではなからうか。幸福そのものが何なのか分からなくなり、消費を中心とした欲求を満たすことに、幸福を求めているのではなからうか。日本は物質的には世界に誇りえる大国であるが、社会を揺るがす事件、事故を考えると、多くの人間が不幸を背負って生きているのが浮き上がってくる。日記で幸福について論じたものを、「幸福論」として編集することにした。

2004年4月20日

2004年3月22日から27日の日記より

前段で、「季節外れの大雪」と書きながら、35年前のことを思い出した。我輩が二十歳のときで、3月に大雪が降った。東京で30センチにも達し、交通が大々的に麻痺した。大雪だけでなく、近頃頻発している、幼児虐待や、殺傷事件、交通事故など、時代の移り変わりの歪が、35年前にもすつかり同じように起こっていたのも思い出した。当時は狂信的な過激派学生が集団暴力や殺人事件を起こし、社会を震撼させたが、オーム真理教が起こした悪逆非道な事件と大変類似している。幼児虐待や誘拐殺人、青少年犯罪、連続殺傷事件などが多発し、35年前も殺伐とした時代だった。時代は間違いなく変わってきているが、現代が抱える病巣は、既に30年も40年も前に始まっていたのかもしれない。幸福の形についても、既に35年前から、家庭の価値観が薄れ、経済が作り上げる豊かさに重きが置かれていた。見方によっては、今も昔も少しも変わっていないのかもしれない。昔は慣れないために、躊躇いがあったり抑制されていた不良行為が、時を刻むのに合わせて慣れてしまい、善悪関係なく、多くの若者が、素直に不良行為するようになっただけではないのか。さらに探求していくと、自由に幸福を求めているはずが、常に不足を感じており、多くの者が幸福の原点を見失っているのではなからうか。幸福の姿は、時代が変わるうとも、少しも変わらないのではなからうか。

人間の幸福というのは、時代とともに変わるものなのか、考察してみることがある。時代とともに文化、習俗、習慣が違ってきていることは確かである。多くの人間が、時代に適した欲求に基づいて、豊かさを享受していることと思われる。豊かさとともに、万民が幸福になったと、断言できればいいのだが、本当に充足した生活を送っている者が、果たして何人いるのだろうか。幸福の基準は、より高価で、より多くの物を持っていることなのだろうか。名前を売って大金持ちになることなのだろうか。資本主義経済を維持していくには、全てが金で動くという原則を守っていかなければならないのである。手を替え、品を替え、あらゆる手段を使って消費文化の発展を遂げてきた。必要不必要、善悪、良否関係なく、消費意欲をそることが、資本家の意思を受け継いだ国家の至上命令で、国民の意思と大きくかけ離れていたのではなからうか。男女同権が騒がれたのは、卑下された女性の鬱憤から起こったものなのだろうか。男尊女卑と社会を糾弾するほど、女性が苦しめられていたのだろうか。女性の社会進出が叫ばれて、女性の地位が本当に向上したのだろうか。男女雇用機会均等法ができて、女性が働きやすい環境となったのだろうか。人間が人間らしく、男は男らしく、女は女らしく、子供は子供らしく、自然体で生きていくのを、根底から覆ってきたのではなからうか。現代は、どこまでも不自然な生活を強いられてい

るのではなからうか。

高齢化社会を向かえ、地方では過疎と高齢化が進み、ややもすると置き去りになった社会に思えてくるが、テレビなどで映し出される、長寿で知られた過疎地のお年寄りが、大変元気で、明るいのに驚かされる。非常に充実した日々を送っているのが窺え、痴呆や寝たきりと無縁の世界である。元気なお年寄りの健康法は、ごくごく自然体で生活することで、余計な情報に振り回されていないのが分かる。生きる役割を持ち、遣り甲斐を感じ、存在感溢れる人々で、人間が本来持っている欲求を全て満たしているのではなからうか。幸福を考えると、そこに大きなヒントが潜んでいる気がする。我輩の人生を振り返ると、順風満帆で、幸福そのものであった。幸福を感じさせる大きな要因は、妻や子供にどこまでも頼られていたからである。荒んだ社会にあつて、妻や子供達が安らげる生活を送れるよう、精一杯生きてきた。目的を持った生き方には、迷いが無く、どこまでも充実した生活となった。家族の気持ちが一つになると、互いに存在感が感じられ、家族との交流は、どんな美酒よりも味わいがあり、煙草よりも、安らげるひと時となった。人間が最も求めているものは、家族が中心となった、人と人との、心の交わりではないのか。離婚率の増大、家庭内離婚、家庭崩壊、家庭内暴力、幼児虐待と、本来最も安らげる世界が、どこまでも腐敗しているのが現代ではなからうか。

現代は足元が見えない社会である。常に遠くを見るように仕向けられ、自分の目線で見るとはなく、背伸びをして、自分らしさを全て削いだ形で、世の中を見ているのである。言い方を替えると、型にはまった生活を強いられ、見識を持たずに、盲目的に突き進んでいるのである。目的としたものが、本当に幸福をもたらすものならいいが、現実には、幸福と縁の薄い人間が多く存在している。動物には個性が存在する。同じ種族でも、個々の行動パターンは異なり、せつかちのものもあれば、おっとりしたものもいる。素早いものもいれば、鈍重なものもいる。人間は特に個性が強く、個人差を一本化するのとは不可能である。それぞれが持つて生まれた性分を無理に殺して、型にはめることは、疎外に他ならない。幼児虐待は、正に、子供を親の思い通りにしようとする表れである。虐待をする、しないに関係なく、親となった多くの人々が、訳の分からぬ社会通念で、子供を縛り付けている。親であれば、子供の幸福を願い、個性を最も大切にしてくれるはずなのに、大人たちが背伸びをして遠くばかり見ており、肝心な足元が見えないのである。先を見据えることも大切であるが、足元をしっかりと見据えた上でなければ先が見えないのである。目指すものは個性に合わせて見つけ出すべきであるが、先に目標が決められ、個性を目標に合わせようとしている。自ら歪が生じ、情緒不安定な青少年が後を絶たないのである。

人間が人間らしく生きられるようにするのが、理想とする社会である。生活手段である職業が、自分に最も適したものを選択できる社会を目指すべきである。個々の持った個性へと繋がっていくのではなからうか。現代社会は、企業の都合のいいように人間を作り上げようとしており、個々の能力を生かせずに、結果的に企業の発展を阻害する原因になっている。多くの経営者は、会社が破綻するまで、社員の持つ、創造力の価値に気が付かないのである。企業にとって都合がいいのは、学業学歴優秀で、何でもイェスと言う、ロボットの人間である。ロボットが肩代わりできる人間など少しも価値がないのに、営々と学歴偏重主義が取られてきた。多くの大人たちが、企業の都合のいいようにならうとしてお

り、子供たちにも同様に強要しているのである。

人間らしく生きるというのは、初めから生き方が規定されるのではなく、自分らしく、自由に世の中を見ていくことである。それは、言い方を替えると、常に夢を抱けるような世界であり、可能性をどこまでも広げていくことである。新たな発見は夢から始まり、あらゆるものの進化の源になる。世界が一つになって、全ての人間が幸福になれるようにするのが進化の道筋であり、人間らしさそのものである。人類、長い歴史を営んできたが、いまだに世界平和は築けないでいる。むしろ、人類滅亡の危機もはらんでいるのが現代であり、人間性は、進化よりも退化していると考えられる。日本を見ても、人間性喪失と考えるを得ない現象が後を絶たず、人類平和の根源を成す、他人への思いやりが欠如してしまった。自分さえ良ければ、他人のことなど一切気にしない人間が増大している。それは、親子、兄弟、友人知人、仲間など、思いやりを育む、情が薄れてしまったのである。夢は、自己を離れた世界を想像することから始まり、相手の気持ちを理解する能力にも繋がって、情が育まれる。思いやりが失せたのは、夢を見られなくなったのと、決して無縁では無いと考えられる。